

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

毎日続くコロナ感染報道を聞く度に気が滅入ってしまう。昭和期の初めに自らの命を絶った芥川龍之介の残した言葉「何か僕の未

来に対する唯ぼんやりした不安である」について、「日本の近代小説」で評論家の中村光男は「混乱と苦痛に満ちた昭和期の姿を明瞭に予感した」と解説している。何かこの時期と重なり大きな禍を引き起こしてしまわない様祈るばかりだ。

日本赤十字社は新型コロナウイルスが引き起こす「三つの感染症」を挙げる。一つ目は病気をそのものの「体の感

染症」。二つ目は先が見えない不安や恐れで瞬間に伝染する「心理的感染病」。三つめは差別や偏見を指し不安から特定の誰かを敵

とみなす事によって、つかの間の安心を得る「社会的感染症」だとして紹介している。自らの発言や心理的考え方が感染症に侵されてい

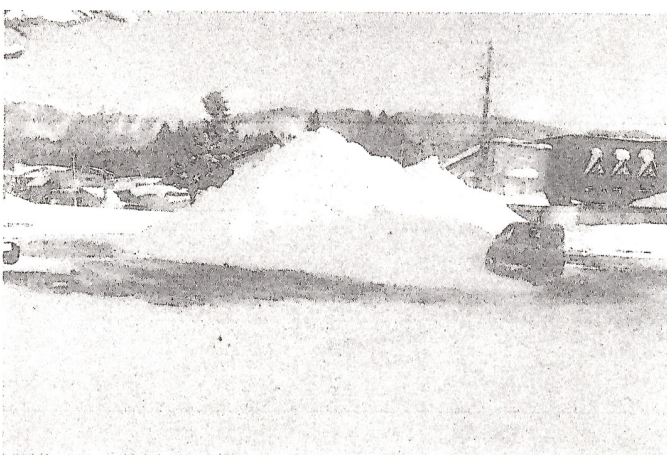
いか、その積み重ねが負のスパイラルとなっ

て更なる感染拡大をさせているか、一人一人が自覚し続けることが大切だ。

不安が引き起こす心理的な現象への自覚が大切だ

雪量で収穫作業は悪戦苦闘の連続

清音と濁音による意味の対比だ。毎日の生活の中でも澄むと濁るでは大違いだ。清音で語りかけるように心掛ける雪中カラン。大寒から節分の間は一年で最も寒さが厳しいとされる時季でもある。例年楽しみに収穫する雪中カラン。なぜか雪中カランが希望を伝える存在にな



森上駅前駐車場を利用した堆雪場。数日前の排雪からあつという間に雪の山に